
『猫の手ほどき』

梅花空木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『猫の手ほどき』

【Nコード】

N0182H

【作者名】

梅花空木

【あらすじ】

一羽は、平凡な毎日に追われながらも、まわりの様子に焦りを感じていた。そんな彼女の癒しとなっていたのが愛猫・海。平穩から抜け出したい女の子とその愛猫の繰り広げるほのぼのファンタジー。

一羽と海

「一羽^{いちは}、いつまで寝てるの!？」と、母に叩き起こされ、朝食を摂り、大学へ行く。毎日これのローテーション。

(虚しい...)。特別原因もないが、なんとなくそんな感じた。ただまわりから就職活動だの、国家試験対策だのと騒がれ、可もなく不可もなくで中途半端な一羽は気持ちだけ焦って空回りしていた。しかし、そんな毎日でも安らげる一時があった。

それは、愛猫・海^{うみ}とのゆったりとした時間。海は灰色の毛をした雄猫で、元々捨て猫だったのを、一羽が拾ってきて育てたのだ。最初は人見知りがひどく、苦勞もしたが、今では、のんびりと我が家での生活を楽しんでいるように見えた。ちなみに名前の由来となつたのは、海を連想させるスカイブルーの瞳だ。

「海...。私もあなたみたいに猫になればいいのにね...?」明らかに現実逃避だが、本心だった。

(...ん。いつの間にか寝てたのか。)
気がつくとベッドで横になっていた。

「おっ目覚めたか?」

「...!?」ひとりきりだと思っていたので驚いた。人がいたのだ。その人は、整った顔立ちと暗い灰色がかった黒髪、カラーコンタクトなのか、スカイブルーの瞳をしていた。

「え...ええっと...あなたは?」その青年には全く面識が無いはずなのに、初対面という気がしない。(不思議な人...。)

「...あれっ? わからない?

いつも一羽と居るのにな...。少し淋しそうに男が笑う。

「じゃ...もしかなくても、う...み...?」とても信じられない。

「大正解!さすが、いっちゃん!」そう言いながら、海は一羽に抱きついてきた。いつもは、人間と猫だから恥ずかしくも何ともない

が、海が人間の姿だとんだかドキドキする。

「…ちよついいから離れて。なんで海は人間の姿になったの？」

「べつつにーただなりたかった、そんだけっ！！」につこりと笑う。
人間になっても気まぐれな海の性格は変わらないらしい。

「まあ今回いつちゃんの願いを叶えるのに、必要だったってこともあるね♪」

「私の願い…？」

「うん。猫になれたらなあって言ってたでしょ？」

「…かつ叶えてくれるの！？」なんだかワクワクしてきた。飽き飽きした平穏とおさらばできる。

「日頃のお礼を兼ねてね。でも、猫になるからには手ほどきをちゃんと受けてもらうよ？」海がにやりと笑う。

「…手ほどき？」自由奔放に生きているように見える猫にもそんなものがあるのかと驚く。

「オレら猫にだって、規則というか、日常を送る中でのルールがあるんだ。猫になるからにはそれを守ってもらわないとね！」海がちよつと威張った調子で言う。

（海が一緒なら何でもできる。）根拠などないが、本気で思った。

「そんじゃっ」一羽、猫になあれ！！「ちゃんと名前を呼ばれるのもなんだかくすぐつたい。

ポンツと音がして目を開けると、目線がかなり低くなっていた。服の代わりにふさふさの白い毛皮。手のひらには、肉球…と完全に一羽は猫になったのだ。

「…すつごい！すごいよ、海！！私猫だっ！！！！」興奮して一羽が言うと、

「うん、うん。一羽は白猫か！かわいいー！！」満足気に言い、海も猫の姿になった。そして、一羽の頬をぺろつと舐める。

「…っ…んなっ…！？」多分人間の時なら赤面していただろう。いきなりの海の行動に動揺する。

「…もしかして、初めて…？」いたずらっぽく海が言う。

「あつ当たり前でしょう！？人間はそんなこと恋人でもなければしないの！」からかわれているのが、余計癪に障る。

「チャームポイント」

空き地に着いた。ここは、一羽が海を拾った場所だ。

「あつ言うの忘れてたけど、一羽が猫になれるのは1週間。その間人間たちの時間は止まっているんだ。だから、家には帰れない。」

「わかった。とりあえず、その手ほどきを1週間以内で覚えて、猫ライフをエンジョイする分にはいいんだよね？」こんなこと絶対今回限りだもん。楽しまなきゃね！

「そゆこと！では、さっそく手ほどき1。自分のチャームポイントを掴むべし！」

「…え！？そんなのないよー。」

「一ヶ所くらいあるでしょ？自分が自信持つてるとこだよ？」海の無邪気さが、今だけ少し憎い。

「…。私…全然ダメで…。」なんだか自分が惨めで凹む。

「自分を否定するのは良くないな。うーん…今回は急だし、オレ直々のやり方を伝授しよう！」また先生のような威張ったしゃべり方で海が言う。

「いーい？特に野良だと、食べ物は死活問題に関わってくるから、真剣に取り組むんだ。あつ丁度良いところに、ターゲット発見！」海はタツと道の方へ走っていく。その先には、猫好きで有名なおばあちゃんがいた。海は甘えた声を出し、おばあちゃんの足にスリスリしたり、自分のお腹を出して身体をなでてもらっている。そして最後に煮干しをもらった。すごい…本気で感心した。

「どう？オレのお手本！良かったでしょ？」自慢気に話す海。

「それと今まで何も食べてないでしょ？煮干し食べて？」おばあちゃんからもらった煮干しを持ってきてくれた。

「…あつありがと。」海の気遣いが嬉しかった。煮干しも猫になつてるせいか、なんだかとてもおいしかった。

「でもさ、猫嫌いの人とかだったらどうするの？ごはんもらつてこ

るか、いじめられるかも…。「好きな人がいれば、嫌いな人がいる。それは仕方ないことだけど、やっぱり寂しい気がする。」

「ハハッそれはもう勘だね！第6感で感じるんだ。…まあそれは冗談にしても、人間だって敵意を感じると、なんとなく近寄らないでしょ？それと一緒にさ。」

「あつあとね？気になったんだけど、猫にも好みつてあるの？」本当は海の好みを知りたいが、遠回しに聞くことしかできない。

「猫も外見重視のやつとか、性格重視のやつ、雌なら強さ重視のやつとか人間同様々だね。」海は苦笑しながら言う。

「ちなみに、オレは性格重視…かな。あつたかいヒトがいい…。」海が少し照れながら言う。

「そっ…か。」なんだかショックを受けている自分に気づく。なんでこんな気持ちになるんだろ…自分の感情がなんだかわからない。

何人かの通行人を相手に練習を終えた時には、日が沈んでいた。

「よおし！いつちゃん、だいぶ上達したね。もう寝よっか。」海はそそくさと土管の中に入る。

「…ね？このまま？」土管の中は薄暗くて（と言っても猫の目なので関係ないが）、狭くて、海の顔が間近にある。

「あたり前じゃん。」他にどうするの？とでも言いたげな海。

「あつもしかして、緊張とかしちゃってる？」ニヤニヤと笑う。

「……っ！」凶星を突かれて何も言えない一羽。

「え、凶星！？…でも、大丈夫だよ。だつてあり得ないでしょ？オレ猫で、一羽は人間だし。」諭すように海が言う。なんとなく哀れそうなのは気のせいだろうか。

「そ…そうよね。元々こんな風に猫になっている時点であり得ないんだからっ…。」わかってる。わかってるけど、なんかやりきれない感じ。

「とりあえずさ、明日また次の手ほどきやらなきゃだから、早く寝よ。」伸びをして、海が言う。

「そうよね、おやすみ！」一羽は、今日1日驚きの連続で疲れていてすぐ眠ってしまった。

海は、そんな一羽を愛しそうに見つめて、土管から出て空を見上げる。新月なのか月は見えないが、星はたくさん輝いていた。

「The precious」

空が白む。土管の中にも朝日が差し込んでくる。

「…ん…。う…み…？」目覚めると、すぐ傍にいたはずの海が見えたらない。途端に不安になる…。海嫌だよ、ひとりにしないで！今の一羽は海しか頼れないのだ。

「…一羽、ごめんね。淋しかった？」海が帰ってきた。何やら口にくわえている。

「…べつ別に。淋しくなんか！でも…一緒に連れて行ってくれたっていいでしょ…？」少しふてくされて一羽が言う。

「本当ごめん。オレら猫は、人間みたいに夜もずっとは寝てないんだ。時間に制約がないからね。」

「だったら、尚更起こしてくれたって…。」自分は足手まといなのかと思っていると、

「うー…その、一羽がさ、あんまり気持ち良さそうに寝てるから、気が引けたんだよ。ただでさえ不慣れな環境だし。それに、一羽は猫になっても、一羽だから一羽の生活習慣を壊すのも…。」言いつらそうに海が言う。海なりの分かりづらい心遣いだったのだ。

「それより…それ…まさか…。」不満が吹き飛ぶかわりに、身の毛のよだつ思いがした。

「見ての通り、雀だよ？こんな丸々太ったの滅多に取れないんだからね！感謝してもいいよ？」大喜びで、恩着せがましいしゃべり方をする海。相変わらず悪気は0だ。だから余計に厄介なのだが。

「…いついくら私が猫になったっていつでも、雀は食べられないよ…海の気持ちは有難いけど。」

「…なんで？」真っ直ぐな海の問いだけに、責められているような心地になる。

「…かわいそう…だから…。」

「じゃあ…人間が食べてる牛や豚、鶏や魚なんかはかわいそうじゃ

ないんだ？」真顔で海が言う。

「それと、これとは…。」「違うと一羽は言いたかった。しかし、

「同じだよ。皆親がいて、もしかしたら子供もいるかもしれない。

誰かの大切な存在だったかもしれない…。『かわいそう』じゃない生命いのちなんて1つもないんだ。」「という海の言葉に阻まれた。

「……。」「確かにそうだ…。海の言葉が正論すぎて返す言葉がない。

「…あつだからって一羽たち人間を責めてるんじゃないんだ。ごめん、きつい言い方して…。」「海が慌てて弁解し、

「生きるために必要な行為だからね、食事は。でもだからこそ、その過程で犠牲になる生命にもつと有り難みを感じてほしい…。なーんて思うわけ！」「最後は照れ隠しなのか、冗談めかした口調で言う。

「海、そんなに深く考えてたんだ…。偉いよ！凄いよ！」「一羽は心から海を誇りに思う。

海は恥ずかしそうに視線を泳がせてから、

「だから、この雀もいっちゃんに食べてほしい。人間の感覚だと嫌かもしれないけど、雀の為にも！」「海はいつだって優しいのだ。一羽にはもちろん、まわりにも。

思いきって食べた雀は、けっこう美味しかった。きつと一生懸命海が取ってくれたからだ、と、一羽は思った。もちろん、雀への感謝も忘れていない。

「あつ一羽…。口の回り汚れてる…。よし！じゃあ手ほどのきの2行つてみよう！2つ目は身支度。清潔感を保つべし。」「

「それって顔を洗ったり、身体を舐めたりってこと…。？」

「うん。猫はけっこうキレイ好きなんだよ？自分の毛皮は常にキレイに保つのは常識。汚れてたら可愛く見えないでしょ？」「

「そっか…。猫も気を遣ってるのね。」「感心して一羽が言う。すると、

「ちょあつと！それ猫に対して失礼だぞっ！」「ちよつと拗ねた様な口調で海が言う。

「…と、ごめん。別に深い意味はなくて…その…あんまりまわりとか気にしてる感じしなかったから…。」しどろもどろで答える。

「…んーまあ、いっちゃん可愛いから許しちゃうー!」一羽の頬を舐めようと、飛びつくが今回は一羽が避けた。

「そう何回もさせないわよ…! だいたいそういうのセクハラって言っのよ!」怒った口調の一羽。本当は、こんなこと何回もされたら一羽の心臓がもたないのだ。

「それは人間の世界でしょ! オレ猫で、一羽も今は猫なんだから関係ないもんねー!」ふふんつと不敵に笑った後、

「それに、コレ親愛を表す行為なんだよ…?」海がわざと悲し気な声で言う。

「だから、そういうのは相手の了解を取ってから…。」つい騙されそうになるが、そうはいかない。

「じゃあ…俺が嫌ってわけじゃないんだね!？」ばああと海の顔が明るくなる。そして一羽に再び飛びついてきた。ちょうど押し倒された形になった。

「…ちよっ!？ なっ何…!？」何かなんだかわからない一羽。

「やっぱりさ、いっちゃん可愛いんだから顔キレイにしてから、手ほどきやろっ!」ペロペロと海がピンクの舌で一羽の顔を舐める。一羽は恥ずかしくて目を瞑っていたが、海が丁寧に顔をキレイにしてくれたことは、感覚でわかった。

「…いっちゃん。キレイになったよ。」海が囁く。…何かが一羽の鼻にくっついている。

「…?」目を開けると、

「ばあっ!」ドアップの海の顔があった。くっついていたのは海の鼻だったのだ。

「…っ! もう終わったんでしょ! ありがとね、離れて。」バツと起き上がり、海と距離をおく。

「いっちゃん、つめたーい。」今度はぶすうつと膨れてみせる海。

「…ぷっ…あははっ！やっぱ海には敵わないなあ。」コロコロと変わる海の表情が一羽にとてもは愛しい。

「…？…」首をかしげる海。

「可愛いってこと！」海に分かり易く言う。

「…ん？…なんか、まだ人間目線で見てるでしょ？今は同じ猫なんだから、同じ目線で見てよ！」なんだか府に落ちない顔の海。

「おほんっ。では、仕切り直して。まず顔を洗ってみよう！」海教授の講義が始まる。

「手をまず舐めて…こう…擦る。そしたら、反対側も同じ様にして…。」海は慣れた手つきで自分の顔を擦る。

「…え！？早いよおー。」と言いつつ一羽も真似る。人間の時はそんなにキレイになるものかと思ったが、けっこうなるものだと驚く。

「次は…胴体。猫だから身体は柔らかくなってるはず。首をよく使って…。毛並みの流れにそうように…。」一羽が真似やすいように先ほどより、ゆっくりと海が胴体をキレイにしていく。

わっ…本当に身体が柔らかくなってる！人間時身体の固かった一羽は嬉しくなった。

「そして、腕・肉球。肉球は地面に直接触れるからちよくちよくキレイにするといいね！…肉球の間のゴミは引っ張るように取るんだ。」そう言って、腕の方から肉球の方へと丁寧にキレイにしていく。

肉球の間のゴミの取り方も実践してくれた。それは一羽が人間の時海がしてるのを見て笑っていた行動だった。過去の自分を反省する。

「あっそうそう。特におしりは清潔にね！」無邪気に言う海。

「おしり…も自分でキレイにするの…？」確かに猫は自分で皆キレイにするものだけど、まさか自分がやるとは思わなかった。

「いっちゃん…！『恥はかき捨て』って言うでしょう…？」海は満面の笑み。もちろんわざとだ。

「…っ！やってやるうじゃない、どうやるのよっ！？」もうこう

なりやヤケだ。

「そうそう、その意気！それでこそ、いっちゃん！…まず…パン
ダみたいに座って…こう…足を上げて前屈みになるんだ。」

「ふー。なんか疲れたわ。」土管に入り寝転がる。

「お疲れ。でも、いっちゃんやる気があっていいよ、いい線いってる！」海が一羽を労う為に一羽の鼻に自分の鼻をちょんとくつつける。

「…ありがとう。」なんだか心があたたかくて、くすぐったくて…しかし満たされていく感じがした。

support

「うーん…。」難しい顔の海。

「…?どうしたの?」

「一羽。今度の手ほどのことなんだけど…ね、1番難しいかも…。説明の仕様がないうだ。辞めておく…?」海が一羽の顔を見る。

「諦めることは、自分にはできないって自分自身を低めることだよ。それは、自分を否定することに繋がらない?『自己否定はいけない』って教えてくれたのは、海じゃない。私はやる!例え出来なくても、最初から諦めることはしたくない。」一羽の穏やかな笑顔から信念が伺える。

「一羽…。」一羽が自分の言葉を覚えていて、それを実践しようとしてくれていることが海は嬉しかった。

「手ほどの3つ目は、喉鳴らし。つまりは感情表現。まあ実際鳴らしているのは、厳密に言うとなんか喉じゃないんだけど…今回それは置いてくとして。オレはコツくらいしか教えられない。頼りにならないくて本当ごめん。」スカイブルーの瞳が憂いに満ちている。一羽は胸が締め付けられる思いがした。

「…っ!そんなことない!コツだけ教えてもらえば、頑張るから。だから…そんな表情^{かお}しないで…?」大胆なことをしていると思いつながら、一羽は海の顔を励ますように舐めた。元気のない海を放っておくことなどできない。それに、元気のない海を見ると一羽もなんだか切ないのだ。

「…ありがと一羽。なんか情けねえのな、オレ。」海が自嘲ぎみに笑う。

「海、あのね。いつも守ってくれるのは本当嬉しいの。だけど、海も私に寄りかかっていいんだよ?そりゃ…私なんかじゃ不安かもしれないけど、せめて海の支えになりたい。」一羽の本心だ。

「…クス…もう充分支えられてるよ。」海がぼそつて呟く。

「え？なあに？」

「なんでもないよ？」海が笑う。

「んー？まあいつか！」いつもの海に戻った事が何より一羽には嬉しかった。

「コツとしては…人間ならハミングする感じ…なのかな。喉に力を入れちゃ駄目。それと、嬉しかったこととか思い出しながらやるとやりやすいと思う。」

「…んー…んー…。こんな感じ？…あそつか、あと嬉しいことを考えないとね。」精一杯協力してくれる海の為にも絶対できるようになりたいと一羽は思う。

海に人間の時より近づけたこと…、海がずつつと傍にいて守ってくれること…一羽は嬉しいことを考える。今までの人生のどんなことより、海とこうしている今が一番一羽は幸せだ。すると…、

「…ロ…コ…ロ…ゴロゴロ…」小さな音だが、確かに鳴ったのだ。「っ！海！！」バツと海を見る。

「いっちゃん！天才！最高！可愛い！」海は余程嬉しかったのか、人間の姿になり、一羽を抱きしめる。

「…っんもう、苦しいってば！」一羽は照れて、ジタバタと暴れる。それでも海は離そうとしない。

「さっすが、オレの見込んだ女だね？」人間の姿の海が一羽を目線の高さまで抱き上げ言う。

「何よ、それー。」一羽は可笑しくて笑ってしまった。

「明日は、いよいよ最後の手ほどき。猫会議に出てもらうからね。もちろん、オレも行くし、安心していいよ！」身体をキレイにしてから海が言う。

「わぁーなんか緊張する…。」一羽は、まだ猫になってから海以外の猫と接触したことが無かった。

「でも、一羽」にわか猫』だと思えないくらい猫らしくなったよ？
自信を持って！」海はいつも一羽の1番欲しい言葉をくれる。

「あっ…最後つてことは明日で手ほどきは終わりなの？」手ほどきの
の終わりは、人間に戻る期限が近いことを意味する。

「そうだね…。でもいつちゃんの頑張りのおかげで、あと明日抜か
してもあと3日あるよ。その3日ですっちゃんをいろんなところに
案内するよ！」自信満々に海が言う。

そう、変えられない未来を憂うより、目の前の現状を楽しんだ方が
得なのだ。海となら楽しみは2倍にも3倍にもなる…そう考えつつ
一羽は眠りについた。

communication

いつも一羽たちがいる空き地から猫の足で約10分くらいのところに寂れたお寺がある。猫会議はその一角で行われるらしい。

一羽が海に連れられて行ったときには、もう何匹か先に来ていた。その中の雌猫3匹が海のところへ駆け寄ってくる。

「海、久しぶりねえ？」とその中の海より年上らしき猫が色気たっぷりに言うと、

「ねえ、たまには付き合つてよお。」と別の猫がブリっ子をして言う。また別の猫は、

「今日この後暇？遊びましょ？」と海の予定をチェックしようする。それぞれが海狙いというのが丸分かりの態度だ。

「…悪いけど。先約あるから。」海は表情ひとつ変えず返す。

「まあ、冷たいんだからあ。」雌猫たちが口を揃えて言う。

…海つてモテルんだ…。なんだか置いてけぼりをくらった一羽は、心がチクツと痛む。すると、

「かわいい子がそんな顔してちゃいけないなあ…あれ？キミ新顔？名前なんていうの？」雄のトラ猫に声をかけられた。美しい猫だが、なんとなくチャラチャラした感じの猫だ。

「あつ翼さん！こいつ海のツレの一羽とかっていう女ですよ。…確か人間の。」翼の取り巻きらしい猫が一羽より先に言う。

「ふーん、なかなかかわいいじゃん。俺は翼。名前が、羽根繫がりなんて、運命感じない？」翼が一羽に近づこうとした。

何この猫！？海助けて！！一羽は後退りしながら、心の中で叫んだ。身の危険を感じたのだ。

「近寄んな！！」海が翼と海の間割って入った。一羽はササツと海の後ろに逃げる。

「なんだ、海。どけよ。…フツ…それとも何？お姫様を守る騎士^{ナイト}気取り…とか？」バカにした様に翼が笑う。翼の取り巻きらしい猫た

ちも一緒に見下した様に笑う。

「まあ…お前みたいなタラシには、渡す気はないな。」海が翼を睨みつけて言う。海が殺気立っているのが一羽にもわかった。

「…何？けど、俺がタラシなら、お前だって同じじゃん？この硬派気取りのムツツリや…痛っ…！！」翼の台詞は、飛びついてきた一羽に顔をめちやくちに爪で引っかかれ、阻まれた。

「よく知りも知らないくせに！私の海を侮辱しないでよっ！！」一羽が大声で言い返す。海が酷い言い方をされ、腹立たしくて、悔しかった。

その場にいた猫たちが皆呆然としている。もちろん、海もだ。

ハッ和我に返った翼の取り巻きたちが、翼に近寄って口々に安否を確認する。

冷静になった一羽は、『私の海』と言ってしまったことに気づく。勢いとはなんと恐ろしいものだろう。

「う…うみ！さっきのはね、飼い主としての意味で…っ。」慌てて海の方を向き、弁解する。

「い…っちゃん…」

「…別に…特別な意味は無いの！売り言葉に買い言葉みたいな…。」しどろもどろ言い訳をするうちに、自分が言いたいことがわからなくなってきた。

「今まで気づかなくてごめん。」海が下を向いて言う。

「へっ？…なっ何に…！？」一羽は思いきり動揺していた。

「そんなにオレのこと想っててくれたなんて…！でも、こんな大勢の前でプロポーズなんて…！っちゃんてば…大胆…。」もじもじとしながら海が言う。完全に勘違いしている。

「…！？…プッ…！？ちよっ…違…！！」焦りながら、否定しようとする、

「…っでも！オレ頑張るから！」と何やらはりきっている海の言葉に阻まれた。

「オレ、『にくじゃが』とか作れる家庭的な奥さんになるから！だから…えっと、いっぱい愛して…？」首をかしげ上目遣いで一羽を見てくる。

「…っ違うつて言ってるじゃない！大体なんで、『肉じゃが』が出てくるのよ。しかも、あなた雄じゃない！雄は奥さんにはなれないのっ！」「海の態度に一瞬心が揺らいでしまう。どうしてこうも人心掌握が上手いのだろうと思いつつ、海のめちゃくちゃで、ツッコみどころが満載の知識に、半ば怒鳴るように突っ込む。

「えー。」不満そうな海。海は時々どこまで本気なのがわからない。

「何やら賑やかじゃの…？」大きな杉の木の影から、三毛猫がゆつくりと出てきた。一羽には猫の年齢はどこで判断するのかわからないが、立ち振る舞いでその猫が長い年月ときを生きてきたことがわかった。

「長老！お久しぶりです。お元気そうで何よりです！」海は三毛猫に走り寄る。

「おお、海か。…すると、そちらが海の言っていた…人間のお嬢さんかの？」三毛猫が一羽に視線を向ける。穏やかそうな年寄りの猫だが、長老というだけあって迫力がある。

「はっ…初めまして、一羽と申します！」一羽は緊張して、声が震えてしまった。

「ふおっふおっ。まあそんな緊張なさらずに。…まず、先ほどの翼のやつのの非礼を詫びよう。あやつには私も最近手を焼かされているのだ。しかし、良い身のこなしと啖呵であつた。よっぽど海を大切に想っておるのじゃな。」感心したように長老が言う。一羽は恥ずかしくて、下を向く。

「まあ揉め事はよくないが…の。海も気に入らないからといって、簡単に相手を煽るんじゃない。全く…いくら腕に自信があると言っても、喧嘩では何も解決せん。そうは思わんか？」

「は…い。…すみま…せん。」海はしょんぼりして言った。

「では、始めるとするかの。」長老が言った。

「…で、うちのごばんは、いつもおいしいの！」と、自分の家の自慢をしている雌猫もいれば、

「その可愛い子がさあ…アプローチしに行くんだけど…」と、仲間に恋愛相談をして、冷やかされている雄猫もいる。そのガヤガヤと賑やかな様子を長老が達観したように見ている。

一羽は拍子抜けした。…想像していた『猫会議』はもっと静かに行われるものだと思っていたのだ。

「…？いつちゃん？」海が不思議そうに一羽の顔を覗き込んでくる。「いつもこんな賑やかなの…？」

「うん。まあオレら猫は基本自己中だから、誰か話してても黙って聞いているなんてあんまりない。人間は『会議』なんて呼ぶけど、実際は『交流会』のが正しいかもね。単独で行動することが多いオレらの情報交換の場だから。」

「あつと、そうだ。一羽に紹介したい奴がいるんだ。」そう言う海の後ろからぴよこつと海に雰囲気の良い灰色の雄猫が顔を出す。瞳は金とスカイブルーのオッドアイだ。

「月グハツです。海の弟…と言っても生まれた日は同じだけどね。この近くで飼われてるんだ。よろしく！」ハキハキと挨拶をした。

「ゆ…え…？」

「うん。『月』って書くの。中国読みなんだって。主が一時中国語にハマっててね。でもオレも気に入ってるんだ。」照れながら月が言う。

「そつかぁー海、兄弟いたんだ！」海を見て一羽が言う。

「…？」海は意味をはかりかねていた。

「海は天涯孤独なんかじゃなかった。ちゃんと兄弟っていう強い絆で結ばれたヒトがいたんだね！よかつ…た…ほん…と。」一羽が海

を拾った時、まだ子猫だった海は雨の中1匹で震えていた。全てに絶望した様なその姿を思い出し、胸が熱くなつて泣いてしまう。

「ごめつ…あたしったら、泣き虫で…。」顔を擦ろうとした時、海が一羽の涙を舐めてくれた。

「いつちゃん…オレの為に泣いてくれるの…？」意外そうな顔で海が聞いてくる。

「あつ…当たり前じゃない！私にとって…海は…その…大切な存在なんだからつ。」一羽が視線を泳がせて言う。

「へへえ。」海が満足気に笑う。「…変な笑い方しないでよ。」恥ずかしいこと、この上ない。

「ねえ、海。もう充分『猫会議』のことは分かったし、帰らない？」一羽が海に言う。

「うん。そうだね！」海が同意する。月と長老に挨拶をし、帰途につく。

ちょうど大きな夕日が沈むところで空も茜色に染まっている。ふたりはその景色を眺めながら、寄り添って歩いた。

後悔しない為に

猫会議のあった夜、一羽はなかなか寝つけないでいた。疲れてはいるのだから、眠っている時間が惜しい。一羽が人間に戻る期限は一刻と迫っているのだ。伸びをして、また横になる。

「一羽、眠れないの？」海が心配そうに聞いてくる。

「あつごめん。なんか寝つけなくて…。」

「そういう時は、無理に寝ようとしないう方がいいよ。少し散歩に行こつ！そうすれば眠れるよ。」海の提案で、散歩に出かける。

深夜なのでとても静かだ。猫目線になると、いつも見飽きていたはずの世界も違つて見えて楽しい。

猫会議があつたお寺の前を通りかかった時、すぐ近くの一軒家のキヤットウォークから月が出てきた。

「あれっ？兄さんに一羽さん！？さっきぶり！」につこり笑う。

「よお！月。主についてなくていいのか？」

「主は今お風呂中」。それよりふたりは「でえと」？

「そう！」海は当然だと言わんばかりに答える。

「ちつ…違つの！ただ私が眠れなくて、散歩ついでにこの辺を案内してもらつてただけでっ…。」急いで一羽が否定する。

「ふーん？まあいいや。そんなおふたりさんにピッタリな場所をオレが紹介してあげる。ついてきて！」ニヤニヤして、月が走り出す。海と一羽もそれに従つた。

「ハッ…ハア…。」どれくらい走つただろう？息をするのがやつとだ。

「大丈夫？一羽？」海が聞く。

「ん…。月つて足速いの…ね。」「お疲れ様。着いたよ！」月が自信満々に言う。

そこは小高い丘の様なところだった。周りに何も無い分、星と月が

とてもキレイにはつきりと見える。今日は満月だ。

「……っ！すごい。」一羽が感動して言うと、

「へえ。こんなところがあつたんだ。」海も驚いた様で言った。

ふたりの様子を満足気に見て月がそろり……と後退りをする。しかし少し後退ったところで、

「ん？月どした？」と海に気づかれる。ムードを壊さない様に邪魔者は去ろうとしたが、仕方ないと月は思いつつ、

「そろそろ主がお風呂から上がる時間なんだ！じゃーねー！」と走り去る。

「ふふつ。良いことしちゃった。アレかな、オレってば『きゅーぴっど』てやつ！？」月はすごく浮かれていた。そして、

「後は『神のみぞ知る』……てね！」空を見上げてから家に入る。

海と一羽は丘の上で並んで座って空を見上げていた。

「一羽、寒くない？」海が一羽を気遣う。

「へ……っ平気！」少し肌寒いが緊張して素直に言えない。

「ったく。無理しちゃって……。」と海がからかった様な口調で言い、身体をくつつけてきた。

「これでいくらかあつたかい？」

「ん。」少し恥ずかしいが、心まで暖まる心地がする。

流れ星が流れる。

「あつ流れ星！願い事を3回唱えなきゃ！」照れたのを隠すように言う一羽。

「なんで、願い事と関係あるんだ……？」海は不思議そうだ。

「願い事が叶うの！」

「ふーん……？」半信半疑の海。

しばらくすると、また流れ星が流れた。

「……。」一羽は、海の幸せを心の中で願った。

「……『一羽を守る』……。」海がぼつりと言った。

「……！」言葉にならない一羽。

「うん、オレはこれしかないな。」照れ笑いで海が言う。

次の日は、海の家内で原っぱに行く。ふたりでシロツメクサの絨毯の中おいかけっこをしたり、じゃれたり、モンシロチョウを追いかけたり…些細なことだが、一羽は幸せを感じていた。

「っはあー。一羽楽しい？」海がごろんと横になり聞いてくる。

「うん！とっても！」海に倣い、一羽も海の隣に横になる。

空はどこまでも蒼く澄みわたり、風はさやさやと心地好い。

「ねえ一羽？こうしていると『でえと』みたいじゃない？」無邪気に海が言う。

「なっなんでよ！…でも、なんで『プロポーズ』とか、『デート』とか知ってるの？」

「ああ、それはね？一羽の本で勉強したんだよ！確か…『妄想らぶ』？とかってやつ！」

『妄想らぶ』とは、一羽の大好きな少女漫画だ。しかし、一羽の友達曰く「イタイ」内容らしい。

「一羽と話して恥掻かないように…ね！」ウィンクをして海が言う。多少間違った捉え方はしているが、海は海なりに頑張ってくれたことが一羽は嬉しかった。

次の日は、雨だった。

「…つまらない。せつかくまた違うところに連れていってもらおうと思ったのに。」一羽が言う。

「ははっ。でも、こればかりは仕方ない。…それに、オレはどこだって一羽と居られれば楽しいけど？」一羽の反応を窺う海。

「またそうやって、ヒトをからかって…！」遊ばれてることが一羽は少し悲しい。すると、

「……。」真顔で黙る海。

「え…からかって…るんでしょ…？」何だかこちらが悪いような気がしてくる。

「ん…ひ・み・つ！」と海がにこつと笑う。

7日目の夜、一羽は人間の姿に戻った。ただし、猫耳と、尻尾は付いている。海曰く『術』が解けかかっているからだそうだ。

「一羽、1週間よく頑張ったね。」海も一羽に合わせて、人間の姿になる。

「…ありがと。お陰で、猫も大変だったことがわかったわ。」一羽が苦笑する。

「…？なんか元氣ないね。どうした？」

「ん？…うん。…そう…かな？」

「なんか悩みごとでもあるの？オレで良ければ聞くよ？」

「ちっ違…。なんか自分でもよく分かんないの。」無理矢理笑顔を作る。

(…そうだ。高校の時も男子にこんな風に思ったことあったっけ…。確かそれが恋だったって友達が言ってた。…じゃあこれは…。)

「…っ！」全身が熱くなる。熱が上がったような感覚だ。

「ん？…大丈夫か？顔赤いみたいだけど…。」海が顔を覗き込んでくる。

「海っ…あつあたしね、海のことか…その、すっ好きみたい。」想いを伝えるのは恥ずかしかったが、自分の気持ちを伝えることができて、すごく嬉しかったし、すっきりした。すると、

「…！？」海は真っ赤になって固まってしまったのだ。そして、

「あぁつと、いっちゃん？そういう事はいきなり言わないで…ね？」余程驚いたのか、その後暫しの沈黙。

「…オレ…だって、一羽のこと大好きだよ？でもさ、種族が違うから無理なんだ。なんで…なんで…種族なんかあるんだろ…？」消え入りそうな海の声。最後は自分に問いかけているようにも思えた。

「ねえ海。あなたもいつか私の手の届かないところへ行っちゃうの…？」今まで飼っていた動物たちのことを考える。海も彼らと同じに自分をおいていくのだろうか。もうおいていかれるのは、嫌だ。

「一羽…ずっと一緒にいる」なんて約束はできないんだよ。未来

はわからないからね。でも、だからこそ今この時が尊いんだと思う。

「海は哀しそうに笑う。」

「…っ！じゃ…じゃあせめて、私のファーストキスを海にあげる！」
精一杯の勇気を振り絞った。

「そういうのは、とつといた方が…。」一羽が本気だということは分かっていたが、何より自分を大切にして欲しいと海は思う。

「でも…これから好きな人ができたとしても、結婚することになったとしても！海以上に好きになる人なんて、絶対いないもん！」

「そこまで言われちゃ、オレが拒む権利はないな。」海は嬉しかったが、照れ隠しに仕方なさそうな言い方をした。

目を瞑っていてもわかる。海の顔が近づいてくる感じ。そしてほんの少し唇が触れ合った感触…。

「…何泣いてんだよ。」

「ううー…。」

せつかく想いが通じ合ったのに…切なくて涙が止まらない。

少し戸惑い、海は優しく、しかし強く一羽を抱きしめた。

「一羽、よく聞いて？オレはいつでも一羽のこと見守ってる。それは例えこの命が終わってもだ。そして覚えていて。世界は自分次第で変えられるってこと。変わるのを待つんじゃない、一羽が変わるんだ。分かった？」もう1度少し長く・強めにキスをした。

「私…海に逢えてよかった。」涙を拭い、満面の笑顔で言う。

「オレだって、一羽が拾ってくれた時どんなに嬉しかったか。そのお陰で、また人間を信じる事ができたんだ。」海も満面の笑みで返す。

『ありがとう。』ふたりの言葉が重なった時、朝日が昇った。

ベッドの上に起き上がる。

「ゆ…め？…じゃないよね。」一羽は人間に戻っていた。海も猫に戻っている。しかし、海のぬくもりがところどころに残っている…。カーテンを開けると、眩しいくらいの朝日とキラキラとした景色。

世界がこんな綺麗だったなんて…海が言った通りだと一羽は思う。

「海お早う。今日から私頑張るよ。もし疲れたりしたら、また元気を頂戴ね！」海の抱き、耳元で囁く。すると、返事の代わりに、海が一羽の頬を舐めた。

永遠が無理なら、せめて与えられた時間の最後の1秒まで、オレがキミを守ろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0182h/>

『猫の手ほどき』

2010年10月8日15時31分発行